

『ダークナイト』

2008 年／アメリカ／クリストファー・ノーラン監督作品

正義は都合よく作られる

会員 藤田 達郎 (67 期)

『ダークナイト』
ブルーレイ ¥2,381 + 税
DVD ¥1,429 + 税
ワーナー・ブラザース ホーム
エンターテインメント
© 2014 Warner Bros.
Entertainment Inc.



1 あらすじ

バットマンは、アメリカを代表するアメコミであり、架空の大都市ゴッサム・シティ（モデルはニューヨークのマンハッタン）の犯罪組織と闘うヒーローの話である。本作は、2008年に公開されたクリストファー・ノーランのバットマン三部作の2作目に当たる。

ゴッサム・シティの犯罪組織は、バットマンの登場、さらに、地方検事ハーヴィー・デントの登場により、弱体化していた。本作の悪役であるジョーカー（顔全体を白く、口には唇が裂けたようなメイクを施し、舌を出しながら奇妙な喋り方をし、仲間であっても躊躇なく人を殺す。まさに狂気を体現したような怪物である）は、犯罪組織がバットマンに怯え、その結果、ハーヴィーのような正義の台頭を許していることに強い不満を覚えていた。ジョーカーは、犯罪組織から雇われ（というか、彼らが狂気に屈して雇わざるを得なくなった？）、ゴッサム・シティに再び恐怖をもたらそうと画策する…。

2 正義から悪、そして作られた正義

ハーヴィーは、バットマンに扮するブルース・ウェインが正体を隠しながら悪と闘うのと対照的に、名前も顔も明かして（検事であるから当然であるが）悪と闘う、ゴッサム・シティの市民にとってヒーローであった。本作の肝の一つは、そんな正義のヒーローであったはずのハーヴィーが、一転して悪に堕ちる場面である。ハーヴィーは、同僚検事のレイチェル・ドーズ（ブルースの幼馴染）と付き合っていた。し

かし、レイチェルは、ジョーカーの罠によって命を落としてしまう。怒りに支配されたハーヴィーは、レイチェルの死の原因を作った相手に復讐をすることを決意するのだが、その手段を選ばない。平気で人を殺めるようになる。正義もぎっかけさえあれば簡単に悪に堕ちる。このことを証明するのがジョーカーの狙いだった（もっとも、ハーヴィーは自分なりの正義を実現していたようにも思える）。そして、ハーヴィーは、レイチェルの死がゴッサム市警のゴードンの捜査ミスにあると考え、彼の息子を殺めようとする。しかし、それはバットマンによって阻まれ、結果として、ハーヴィーは命を落とす。ゴードンは、市民がハーヴィーの犯した犯罪を知れば絶望するだろうから、結局ジョーカーの狙い通りになってしまったと落胆する。しかし、バットマンは、直ぐさま、ハーヴィーの罪を全て自分がかぶることをゴードンに提案する。つまり、虚像であってもハーヴィーが正義のヒーローであり続けられれば、ジョーカーの狙いは実現されないのである。結局、ハーヴィーは、高潔な検事のまま人々の記憶にとどまることになった。正義は暴走したが、最後は、都合よく作られた。

本作は、その作品性の高さが高く評価されていたにもかかわらず、「アメコミだから」という理由？でその年のアカデミー賞作品賞の候補に選ばれなかった。翌2009年のアカデミー賞作品賞の候補数が5作から10作に増えたが、前年の作品賞候補から本作が漏れたということが理由の一つとなっているらしい。